



×



カルチャー

人のために豊かさや便利さを提供する土木を、生活のなかに浸透させていくこと。「DOBOKU×カルチャー」では、私たちと土木の距離を縮めてくれる、そんなコンテンツを紹介します。

第 15 回

『下水道写真』



東京都葛飾区の水元汚水幹線。1988(昭和63)年竣工。らせん式のマンホールで、人が降りるためのらせん階段のすぐ隣で下水道が通っている。ここでは、汚水が1回転半しながら下部に落ちていく間に3つの支線が合流する。

都市の地下に張り巡らされている下水道。ないと絶対に困る重要なインフラでありながら、多くの人にその存在を意識されていないものだ。

青春期、ふとしたきっかけでその内部に入る機会を得たことで、その空間に魅せられ、30年以上にわたり下水道の写真を撮影し続けてきたのが白汚零さんだ。

高知県出身の白汚さんは10代で洋楽に目覚め、洋楽に関わるビジュアル表現を追求したいと高校卒業後に上京。表現方法を模索するうち、写真に行き着いた。

上京して間もない頃、下宿先の近所で下水道の浚渫工事現場に出会い、自然と興味を持って現場監督と話すうちに、マンホールから約3メートル地下の下水道に入れてもらう体験をした。



仙台市青葉区の袋町幹線。1903(明治36)年完成。幹線の上部は横に広く、下部は狭くなっている卵型。この形状だと、低流量でも流速が落ちず、増水時には流量を増やすことができる。なお、この場所を上から見ると四角く見えるようレンガが組まれている。卵型の幹線といい、当時の職人の技術には目を見張るものがある。

「今は部外者が下水道管の中に入れてもらうなんて不可能でしょう。でもそこで、地上の喧騒と隔絶された、せせらぎ音、真昼なのに光のない漆黒の世界、そしてマンホールから差し込む光とのコントラストを体験したことで、その後ずっと下水道内の空間を撮り続けることになったんです」と語る。

その後、下水道内の清掃をするアルバイトを見つけ、熱心にその仕事に従事するうち、休憩時間に撮影をする機会を得られるようになった。

「下水道内では常に硫化水素ガスが発生する危険もあり、その数値を計る機械も携帯しなければなりません。外からの空気を送り込むために送風機を回す必要もあります。そんな状況下でなくては撮影も不可能なので、これは本当にありがたい機会でした」



そのうち、各自治体の下水道局や関連業者向けの業界誌「月刊下水道」に、写真とともに連載エッセーやレポート記事を寄稿するようになった。

その記事が徐々に全国の下水道関係者の目に止まり、東京都下水道局からの依頼で、2009年から3年連続して都下水道局の広報イベントでの写真展が実現。そこで知り合った下水道局OBや関係者から「ここを撮ったらい」「あそこがいい場所がある」などの情報を得ることができて、さらに撮影内容が広がった。

2010年には20代から30代に撮りためた作品を含めた初の写真集『地下水道』を上梓する。一方で2009年の都のイベントが国交大臣賞を受賞したことで、全国の自治体からさらなる撮影の機会を得ることもあった。



東京都足立区の梅田幹線(左)と西新井幹線(右)の合流部。1984(昭和59)年完成。三脚を使った長時間露光で、水の流れる姿を滑らかに写し出す。階段状の流路は美しく美しい。
©Ray Shirao Photography

「その後、仙台市に手紙を書いて下水道内の撮影を打診したところ快諾され、2010年に首都圏以外の下水道を初めて撮影することができました。その翌年には東日本大震災で沿岸部にある仙台市の下水処理場が壊滅的な被害を受け、その復旧を記録することにもなったのです」

仙台を皮切りに、札幌、横浜、名古屋、大阪、神戸、北九州、福岡と全国各地の自治体から下水道の撮影依頼を受けるように。撮影した写真は各自治体のパンフレットなど広報に使用されている。やはり下水道の普及率が高いのは人口

の多い政令指定都市で、そういった都市には被写体として魅力的な古くからの下水道管、空間があるという。主にこの時期に撮影した作品をまとめ、2冊目の写真集『胎内都市』を2018年に刊行した。

「古くからの下水道管の形は卵型で、特に古いものはレンガ貼りだったり左官仕事が施されていたり。その一方で近年は工場でユニット式で作った水道管やシールドマシンで掘られた円形の経路がひたすら続いているだけの、どこを見ても変わりばえのしない下水道管がほとんどですね」という。

下水道を撮影し始めた80年代半ば頃からはモノクロのフィルムで撮影していたが、2000年前後には写真もデジタルが主流となってくる。それ以後は、カラーの作品も増えてきた。

下水道の内部は闇。撮影時にはライトをつけることや、三脚を立ててカメラを固定し、長時間撮影をするなどの必要もある。それら重たい機材を持つて地下深くに下り、狭い空間で撮影するのは大変なことだ。また、合流式の下水道では底にぬめりが発生するので、「胴長」と呼ばれるズボンのようなゴム長を履くが、それでも滑って転んでしまうことが。自分で滑りにくい靴底を貼ったり、歩き方を研究するなど工夫を重ねてきた。下水道管内は湿度が高く、場所によっては突然頭上方向から汚水が流れてくることもある。常に水蒸気との戦いで、水を被らないようにカメラを守り、レンズから水滴を拭いながらの撮影になるという。

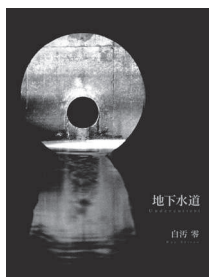
「下水道の撮影にはどうしても自治体や現場の方々のご協力が必要です。一日に何箇所も撮影させてもらうため、時間をかけず効率的に撮影できる

手法を考え抜いてきました」とも語る。ごく身近にありながら、私たちが入ることのできない下水道管内という場所にこんな妖しくも美しい世界が広がっているとは。白汚零さんの作品は、その写真集のタイトル通り、地下に広がる「胎内都市」の奥深さを教えてくれる。

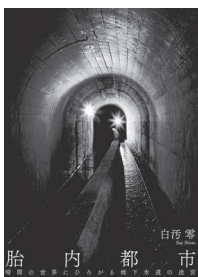


白汚零●しらお・れい
1965年高知県生まれ。下水道、水道管や鍾乳洞などの穴を撮影し続ける写真家。しかし最近はお溝などの開溝(開渠)にも興味津々。

既刊紹介



『地下水道 Undercurrent』
発行：草思社(2010年)
定価：本体2800円+税



『胎内都市 暗黒の世界にひろがる地下水道の迷宮』
発行：草思社(2018年)
定価：本体2300円+税

白汚零氏が手掛けた写真集は2冊。1冊目の『地下水道』は、長年独自に撮りためたフィルム写真をメインとしており、モノクロが基調の1冊。2冊目の『胎内都市』は、各地の自治体の協力の下で撮影された写真が多くを占める。ライティングなどにも力を入れた、鮮やかな1冊だ。

2冊に通底するのは、圧倒的なインパクトだ。地中に広がる漆黒の世界が垣間見える不思議な写真集、ぜひ一度手にしてほしい。